研究の窓

社会保障コンファレンスについて

本号の特集「社会保障の実証分析——マイクロ・データの応用」は，2000年7月に開催された第38回計量経済学研究会議（いわゆる「琵琶湖コンファレンス2000」）における報告及び討論に基づく論文がその大宗を占めている。同コンファレンスにおいては，「社会保障の計量経済分析」をテーマに，10本の報告論文をめぐって，3日間にわたって熱心かつ活発な意見交換が行われた。本誌編集委員である岩本康志京都大学経済研究所助教授が全体のオルガナイザーをつとめられ，当研究所からは金子能宏室長が報告者として，また尾形が討論者として参加した。

コンファレンス全体は4つのセッションに分けられている。セッション1は「医療・介護のミクロ計量分析」というテーマであり，橘木俊詔京都大学教授の座長の下に，初日の午後，3本の論文が報告された。セッション2は「社会保険の機能」というテーマで，小椋正立法政大学教授の座長の下に，同じく3本の論文が2日目の前半に報告された。セッション3は「診療報酬のインセンティブ」というテーマで大竹文雄大阪大学助教授の座長の下に2本の論文が2日目の後半に報告された。そして，3日目，最終日午前のセッション4において「公的年金の課題」というテーマで，岩本康志京都大学助教授の座長の下に2本の論文が報告された。

このように，実質2日間で10本の論文の報告及び討論という，きわめて密度の濃い，緊張感のあるコンファレンスが展開された。しかも取り上げられたテーマがいずれも理論的，実証的に興味のある問題であるばかりではなく，政策論の観点から見ても重要な意義を有する論文が多かったように思われる。

その成果は本号特集の各論文に見られるとおりであるが，コンファレンスにおける真摯な議論を踏まえた，いずれも充実した内容の論文となっている。こうした試みは近年では初めてのことであるが，本誌編集委員会におけるご議論等を踏まえ，今回，コンファレンスと密接に関連した特集を組んでみた次第である。

ここで，本号特集からは少し離れるが，社会保障に関するコンファレンス一般ということについて考えてみたい。社会保障に関する研究状況という問題を考えるときにいつも筆者の念頭に浮かぶのはサミュエルソン教授の次のような言葉である。

> 「自分は，身動きできないほど繁茂してしまった茨の森の中で，1つの小さなナイフをもって，人の通れるような道をつくろうとしているようなものだと考えている。経済学というのは，経済学者の数の自乗に正比例するぐらいの繁雑さで，カテゴリーや体系の氾濫をみせてきているが，結局は概念規定や推理の過程をはっきりさせてつきつめてみると，原理的な骨格ともいうべきものは，案外に簡単なものであり共通性をもったものであることが分かると思う」[1)]

サミュエルソンは，ここで経済学の状況ないしは自らの仕事の方向について論じているのであって，社会保障について論じているわけではもちろんない。しかしながら，論じられている文脈

は異なるものの，サミュエルソンの言葉は，社会保障の研究状況についてきわめて示唆的な内容を含んでいるように思われる。

社会保障は，その制度が「身動きできないほど繁茂してしまった」ジャングルにたとえることができる。社会保障の研究者は，経済学，社会学，法学，政治学をはじめとするさまざまな種類の，しかし「1つの小さなナイフ」をそれぞれの手に，このジャングルの奥深く分け入ろうとしている。多くは確かな地図とてない「人跡未踏」の地であり，立ちはだかるジャングルの広大さに比べて，手にしたナイフはあまりに小さく，か細く見える。しかし，とにかく社会保障を本格的に研究するからには，ジャングルの奥深く踏み込んでいく必要がある。そして，そうやって奥深く探検しているうちには，サミュエルソンの言葉ではないが，案外「つきつめてみると，原理的な骨格は簡単なものであり，共通性をもったものである」ということになるかもしれない。

いずれにせよ，社会保障は，広大な「新大陸」(「暗黒大陸」?) にも似た分野であり，われわれは，今ようやくその沿岸部にとりついたにすぎないと考えられる。これから一歩でも二歩でも奥地に分け入っていくためには，1人1人の探検者＝研究者の勇気と努力とともに，相互の情報交換や意見交換が欠かせない。探検は，先人の努力を踏まえつつ，同時代人の貴重な情報や意見を最大限に活用するのでなければ，十分な成果をあげることはできないだろう。社会保障に関するコンファレンスの意義を筆者なりに解釈するとすれば，以上のようなことになる。

今後，国立社会保障・人口問題研究所においても，社会保障に関するコンファレンスをさまざまな形で展開していくことを考えていきたい。その際，「琵琶湖コンファレンス」のように，比較的近しい分野の研究者が集まり，専門的な議論を深めることと同時に，異なった分野の研究者が集まって議論をすることが考えられてもよいだろう。手にした「ナイフ」の種類は異なるかもしれないが，対象となる「ジャングル」は共通のものだからである。

注

1) 都留重人『近代経済学の群像：人とその学説』(1964)，日経新書。

尾　形　裕　也

(おがた・ひろや　国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部長)